

聖書:テサロニケ人への手紙第一4章13~18節

説教:主と出会うとき

はじめに

今から五年前の教会創立十周年を記念して屋上に十字架を立て、十字架の下には納骨堂を設けることになりました。納骨堂を造ったときは、いずれは教会の墓地を持ちたいと言ってはいましたが、それがいつかなうのかはだれもわかりませんでした。それが今、きょうの午後から臨時信徒総会が開かれて、教会の墓地を買うかどうかについて話し合われる、というところまで来ました。ピリピ書2章13節に「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です」とあります。本当にそのとおりだと思います。墓地を買うかどうか考えて決断するのは私たちひとりひとりであっても、神が私たちのうちに働いて志を与え、物事を前に進めさせてくださる。そのような神の働きに促されて、今日の総会の場に私たちが臨もうとしていることを覚えたいと思います。

今日はそのことにちなみ、予定を変更してテサロニケ人への手紙第一を開くことにしました。

1 眠った人たちはどうなるのか

1) 望みのない人たちの考え

いま、終活セミナーとか終活フェアというものがあって、そこでは自分の人生の店じまいの仕方や、葬儀のことを考えるのだそうです。あるセミナーでは実際に棺桶の中に横になってみるということもするそうです。

でもどうでしょうか。そのようにして葬儀のことやお墓のことを準備しておくのはよいとして、その先のことについてはどのように考えているのでしょうか。これまで家には、先祖代々の墓というものがあって、死んだらそこに葬られる。お盆やお彼岸になれば、家族の人たちが亡くなった先祖の苦勞を偲び、お参りに来てくれる。それが当たり前と思っていた。でも今は核家族になり、家を継ぐ者も高齢となり、お墓を維持できなくなってきた。それで墓じまいする人たちもいます。こうなるとだれもお参りに来る人がいない。こんな時代ですから、日本人の死生観はどんどん変わらざるを得ない。みな不安になっているのではないかと想像します。

聖書はどう言っているか。13節。「眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知ら

ずにいてほしくはありません。あなたがたは、望みのない他の人々のように悲しまないためです。」

「望みのない他の人々」とは、読んでおわかりのとおり、死んだ者がよみがえるということ信じない人たちのことを指します。日本はこれからお盆の季節に入ります。お盆というのは先祖の霊が家に戻ってくる時なのだそうです。私が産まれた村では、お盆の一週間くらい前からでしょうか、お墓の前や家の玄関先で「迎え火」と言って麦わらを燃やす習慣がありました。亡くなった先祖の霊は、定期的に家に戻り、時が来ればまたどこかに帰る。日本人はそう考えてきた。何かに生まれ変わる、ということも一部では信じられていたようですが、死んだ人が肉体をもってよみがえるという信仰はありません。

2) 望みを持つ人たち

では聖書は、眠った人たち、すなわち先に天に召された人たちのことについて、なんとやっているか。実はテサロニケ教会の人たちは、人によって考え方がばらばらで混乱していた。それには事情があった。テサロニケは今のギリシャの中であって、パウロが開拓した教会でした。そのことは使徒の働き17章に出ています。パウロが直接関わることができたのはほんの短い間だけで、後は信仰のしっかりとした長老に任せることになる。でもキリスト教という教えができてまだ間もないわけですから、しっかりとした教科書があるわけではない。どうしても細かなところで分からないことが出てくるわけです。パウロもそのことは気になっていたようです。後になってパウロは、テサロニケ教会がどうなっているか心配し、自分の弟子であったテモテを送って様子を見に行かせます。戻って来たテモテはパウロに報告をする。「テサロニケ教会はたくさんの試練に遭ったそうですが、かたく信仰を保っていました。」そう言ってから、眠った人たちのことについて意見の食い違いがあることを付け加えました。パウロはこの報告を聞き、これはきちんと整理して教えておかなければと考え、早速この手紙を書いたわけです。

2 イエス

1) 天から下って来られる

パウロが書いていることは誠に明解です。少し順番が前後しますが、16節から見ていきます。「す

なわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から降って来られます。」

これはパウロが発明したことではない。使徒の働き1章9節以降にもはっきり書かれています。よみがえられたイエスは四十日間、使徒たちの前に現れてくださった後、天に上げられていきます。そのとき御使いが使徒たちにこう語りました。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上っていくのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」

主はいま、父なる神の右におられますが、やがて再び天から降って来られる。私たちはそのことを待ち望んでいるわけです。どうして待ち望むのか。その日、完全な救いをいただくことになるからです。クリスチャンとはどんな人たちですかと尋ねられたら、主の再臨の約束を信じながら巡礼者のように、この地上を苦しみながら歩んでいる人たち。そんなふうに見えることができます。

2) まず死者がよみがえる

そのイエスが再び来られる日、何が起きるのが15節にある。「私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。」

テサロニケ教会の一部の人たちは、生き残っている人たちがまず最初に主にお会いするだろうと考えたようです。でもそうではない。きとんと順番が定まっています、まず先に眠った人たち、すなわちキリストにある死者がよみがえる。その次に、主の再臨の時に生き残っている人たちが主にお会いする。そういう順番だということです。

そして17節。「それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

たとえ、どんな苦しみの中にあつたとしても、このことをいつも忘れずに覚えていなさい。もし気落ちしている兄弟がいたなら、このことを思い起こして励まし合いなさい。そのように結ばれています。

3 主と出会う

1) 今は見えないけれど

少しひねくれた疑問かも知れませんが、なぜイエスはいま姿が見えないようにされるのでしょうか。時々こんなふうに質問されることがあります。「目

で見えないものを信じろと言われてもむずかしい。本当に神がいるのなら、見せてほしい、見たなら信じる。」もつともな質問で、できることなら私も見てみたい。かつてイエスの弟子のひとりであつたトマスという人もそうでした。「主のわき腹に手をれてみなければ、決して信じない。」きわめて合理的で、いまなら彼は科学者と呼ばれるはずです。そんなトマスに、よみがえられた主が現れて下さり、こう言われます。「あなたはわたしを見たから信じるのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」(ヨハネ20章29節) こう言われていますから、私たちは主を見ることはありません。どうしてそんなまどろっこしい方法をとるのかと不思議ですが、そう言われたからにはきちんとした理由があるはずです。

たとえばペテロのことを考えてみましょう。彼は湖で漁をしていたときに主に出会い、弟子に召し出されました。当たり前のことですが、彼は肉の目で主の姿を見ました。彼は最初に主を見たとき、この方はきよい方であつて、自分は罪深いと感じていた。でも彼は結局何をしたか。主が十字架にかけられようとしたとき、こわくて逃げてしまった。そして、主が十字架で死なれ、墓の穴に葬られて姿が見えなくなったとき、彼はなにをしていたかを想像してください。彼はそれまで、自分のことは自分がよくわかっていると思い込んでいた。でも主の姿が見えなくなって、初めて自分の本当の姿に向き合うことになった。いつも格好いいことを言い、強がりやを言っていたけれど、本当は死ぬことがこわかった。自分は一番だと思っていたけれど、弟子の中でも最低の人間だつた。

私たちがいま肉の目で主を見ることのない理由はここにるように思います。主の姿が見えない間、あなたは自分の本当の姿に向き合いなさい。肉の目で主の姿を一生懸命探してもなにも見えません。その代わりに、私たちには霊の目が与えられている。霊の目で何を見ますか。自分の中を見ます。実はそこにイエスがおられる。私たちの最も弱いところに主がおられる。最も目をそむけてふたをしたくなるような所に、主がおられる。主が小さくなって私たちと一っしょに苦しんでおられる。主の十字架はそこに立っています。

2) やがて主を見る

この方は、いつまでも姿を隠しているわけではありません。この方はやがて再び天から来られます。そのとき私たちは主とともにいることになる。

私たちいま教会墓地を買うかどうか決めようとしているわけですが、私たちにとって墓地とはどんな場所なのだろうかと考えます。やがて主はラッパの響きとともに天から下ってこられます。まず、主にあって眠っていた人たちがよみがえります。墓に葬られた人たちが、その日、罪のない新しいからだをまとしてよみがえります。

世の人たちにとっては、墓は死んだ者を思い起こして涙に暮れる場所ではないでしょう。しかし、私たちにとって墓は悲しみの場所ではなくて、かえって喜びの場所ということになります。

先日、藤野聖山園に行って提案されている墓地を見てまいりました。私はこれまで、お墓に行って楽しいと思ったことは一度もありませんでした。でも今回は違いました。ひとことで言えば「楽しい」「うれしい」。なぜそう感じるのかは自分でも不思議でした。やがてここで主にお目にかかることができる。もしそこを墓地とするなら、そういう場所になるわけです。

モンゴルに向かう飛行機から下を見るとずっと砂漠が広がっていて世界は実に広いものだと感じました。でも私たちは、世界中を巡って主にお目にかかる所はどこだろうと探す必要がない。実にシンプル。あなたが葬られたところ、そこであなたは主に出会うことができる。

主が与えてくださる望みのすばらしさを覚えて御名をあがめます。